

当院のロゴマーク“うづら”の由来は、藤原俊成が自身の代表作として、自賛した和歌、

“夕されば 野辺の秋風身にしみてうづら鳴くなり深草の里”（藤原俊成 千載和歌集）

にあるとおり、その昔、深草は、うづらの里として知られたことによります。

俊成卿の歌は 伊勢物語 1 2 3 段、深草の里にすむ女の話をもまえています。そこでは、深草に住む女が、心変わりしそうな男（在原業平の邸宅は現在の西浦町四丁目辺りにあったという説もあります）に、

“野とならば うづらとなりて鳴きとらむ かりにだにやは君は来ざらむ”

“あなたが、去るならば、私は鶉になって泣き暮らしましょう、そうすれば、いつかあなたが狩りに来られて、私をみつけるでしょうから”とする、雅な歌で男の心をなぎ止めたとあります。

しかし、皆様はうづらの鳴き声をお聞きになった事があるでしょうか。多くの方は、鶉を見たり、鳴き声を聞いたりした事はないのではないかと思います。鶉は、地味な褐色の小型の鳥で、草深い野に棲み、人が近づいても滅多に飛び立たつことなく草の中を這い回って逃げるとのことですから、この歌の情景を思うに、鶉の姿は、深い草に隠れて見えず、また、メスの鶉は、秋の山野に、密やかにグググクルルと鳴くことですので、この歌の世界は、視覚的にも、聴覚的にも誠に、かすかなもので、まさに、幽玄の境地ということなのでしょう。俊成卿は、この密やかではあるが、心にしみる鳴き声を聞かれたのでしょうか。

歌の世界で「鶉」は、「鶉鳴く古びた里や家」といった物寂しい景色を表現する枕詞として多用されるとのことですので、“深草”という地名にはマッチしているかもしれませんが、今後、大いに発展したい京都医療センターが“古びた家”では、ちょっと、具合が悪いと思われる方もおられるでしょう。しかし、逆に、意外な場所に、すばらしい病院があるというのも、雅や幽玄のひとつの形として、良いと思う方もあるかもしれません。

その昔、深草の鶉の声は他郷に勝り、すばらしいとされており、都下の詩客が仲秋の頃、ここに来て美声を聞くと言う風習があったそうです。この時の鳴き声は、おそらくメス鶉の密やかな声ではなく、オス鶉のなわばりを声高に主張する鳴き声であるはずで、『チッカッケー』と意気揚々と鳴く鶉の鳴き声を聞くと、どんな鳥の声聞くよりも勇気凛々となるようです。江戸時代には、底力のある鶉の鳴き声は大いにもてはやされ、その鳴き声を競わせる「鶉合わせ」が行われ、中には金銀、象牙をちりばめた鳥かごに鶉を飼い、江戸中の愛好者が一同に会して互いにその泣き声を競い、横綱、大関というような番付表まで作ったといわれています。「鳴き合わせ」とは、飼い主が持ち寄った数羽のオスを一度に出会わせることで、それぞれが縄張りを主張して鳴き始め、中でも一番声が長く、力強く最後まで鳴き続けたものを勝者とし、勝敗を競った様です。最近、深草地域のマスコットキャラクターの名前が、深草うづらの「吉兆（きつちょう）くん」と決定されました。この名前には、鳴き声が「ご吉兆」とも聞えることから、深草うづらの吉兆くんが、幸せの知らせの運び手になり、地域に「吉」をもたらすようにとの思いが込められています。

京都医療センターの“うづら”は、密やかに、雅に人の心に迫るのか、あるいは、声高らかに、“ご吉兆”と幸せの知らせを運んでくれるのでしょうか。

最後に、議論はさておき、鶉といえば、やはり、焼鳥でしょうといわれるかたには、蜀山人先生、自賛の狂歌

“ひとつとり ふたつとりては 焼いて食う 鶉なくなる深草の里”

（太田蜀山人、蜀山百首 5 4 番）

秋の夜長に、ご賞味あれ。

